

## アイヌ通送人吉良平次郎と山本多助

7月26日(水) 13:30~15:00 東京会場

8月1日(火) 14:40~16:10 札幌会場

講師 松本 成美 釧路アイヌ文化懇話会会長

皆さん初めまして、ただいま御紹介いただきました松本でございます。今日はアイヌ通送人吉良平次郎と山本多助エカシのことについてお話をさせていただきます。

皆さんにお配りした新聞の切り抜きにありますように10日前に釧路市民文化会館で「アイヌ通送人・吉良平次郎」という劇を演じました。定員370人の小ホールで3回の公演だったのですが、3回とも立ち見の出る盛況でした。

「アイヌ通送人・吉良平次郎」は、アマチュア劇団の釧路演劇集団の団員が主要人物を演じ、20人以上の一般市民が脇役を演じた市民参加劇で、「アイヌ・ネノ・アン・アイヌ - (人間らしくある人間)」というサブタイトルをつけた劇です。

まず、アイヌ通送人とありますが、この通送人の仕事というのは、いわゆる郵便の配達ではなく郵便局と郵便局の間を行囊に郵便物を入れて運ぶ仕事です。昼の間に集配された郵便物を、夜中に離れた郵便局まで運んで行って、行った先の郵便局からは、そこで集配された郵便物を運んで戻って来るという夜の仕事です。運ぶものは、普通の郵便物や小包、書留もあります。そういった郵便物を運ぶのが通送人です。そして、吉良平次郎はアイヌです。アイヌである吉良平次郎は非常に性格がいい、まじめであるということで、通送人になってその仕事に従事するということになりました。まず、このことを最初に理解していただきたいと思います。

平次郎は宿徳内というところで、猛吹雪の大正11(1922)年1月20日に遭難します。遭難の状況について連絡を受けた札幌通信局は本省である通信省に連絡をしました。すると、すぐに東京から映画会社がやって来て、映画を作ることが行われたのです。そして、11月には映画ができるというようなことになっています。そういったところをプロローグとして劇は始まります。

この遭難の様子が自治新報が全国に報道したところ、4,162円25銭という当時としては莫大な義捐金が集まったということです。お金を送ってきた人たちがどういうことに感動したのかというと、吉良平次郎は猛吹雪の中でまず運んできた行囊を自分の着ていたズック製のマントで覆って、それが風で飛ばされないよう帯でくくりつけました。そして、自分の命綱である竹の杖を立て、その杖に目印なるよう手ぬぐいを巻きました。普通であればそこで行囊に覆いかぶさるようにして亡くなるということが想定されますが、彼の場合はそうではなかったのです。遭難場所からすぐ近くの宿徳内の部落にはタキモトという家があるのですが、そこを目指して100メートル進んだところで亡くなっています。その家に連絡して行囊を無事に守らなければ

と考えて、また、ここで死んではならない、どこまでも生きなければならない、自分の命は神から与えられたものであって粗末にはしてはならないという信念のもとに100メートル進んだのではないのでしょうか。行囊を命がけで守り、自身も最後まで生き抜こうとしたという行動が自治新報の報道を読んだ全国の人たちに感動を与えたのではないのでしょうか。

4,000円を越える、今のお金に換算すると莫大な金額の義捐金が集まったのですが、そのお金が送られてきた時に手紙が同封されていました。劇の中では4人の手紙を紹介していますが、ここでは1つだけ申し上げます。「今や世間、世界の現状は、悪弊を受け、腐敗の極度に達し、世を挙げて自己の欲望のみに走り、上は高官より下に至るまで自己の職責さえも忘れ、下道の行いに等しき行為を為している。満鉄アヘン問題、東京市疑獄事件など、世間上役の位置にありしながら下劣な行為を行い、一つも自己の責任を省みず、邪欲に汲々なるものが多い」とあります。他にも書いてあるのですが省略します。これは東京の片山清松という人が書いたものです。

この大正11年の頃の社会、この東京の人が言っている社会と現在の社会の状況は一致しています。現在の社会、命を軽んじ、無責任で、上は疑獄を行い、それが何でもないかのように通用しているという現在の社会の状況、それがまさにこの吉良平次郎が国民から支持をされた時の状況とダブっているのです。そのため、劇を見た人たちは非常に感動するのです。

プロローグの最後に山本多助が登場します。そして、山本多助が「平次郎の家が壊されることになった。平次郎は、郷土の誇りであり、俺たちアイヌ民族の誇りだ。どうか平次郎を顕彰する像をつくりたいんだ、みんな協力してくれや」と言ってプロローグが終わります。吉良平次郎は36歳で遭難したのですが、その時、山本多助はまだ若い18歳の青年でした。吉良平次郎と山本多助は又いとこの関係にあり、そして、隣近所に住んでいました。私たちがその事実をなかなかつかめませんでした。「アイヌ通送人吉良平次郎研究資料集成」という本を吉良平次郎研究会で作る時にも分かりませんでした。資料が散逸していて隣近所といってもそれを証拠立てるものがないのです。とにかく、平次郎遭難の時、又いところである山本多助は、捜索隊の一員として平次郎の遺体を発見しています。そして、アイヌ民族の誇りである平次郎を顕彰したいと市民、釧路市、釧路市長に訴えるという顕彰運動に取り組むわけです。

次に1幕は、大正11年1月20日、遭難の日から始まります。平次郎にはミノという1歳上の奥さんがいました。

そのミノには平治郎と結婚する時に八郎という0歳の連れ子がいて、この時には4歳になっています。そして、ミノのお腹の中には何カ月目かの子供がいたのです。そのミノが八郎をおんぶして、叔母のサクと一緒に多助の家に飛び込んできて「多助さん、どうも胸騒ぎがするんだ」と言います。多助が「どうしたんだ」と聞くと、ミノは「今、平治郎が家に寄って芋粥を2杯食べて、昆布森の局に出かけていったのだけれど、何か胸騒ぎがする。だから、何とか桂恋とかの方を当たってみてくれないか」と多助に頼むのです。その時、多助は「でも、俺にはどうも納得がいかない。なぜって吉良平治郎はアイヌなんだ。俺たちアイヌは生きているものはすべて尊いものであり、みんな神々に支えられていると考えているんだ。自然と人間が共生するというアイヌの考えを持っていたら、郵便物を届けるためとはいっても猛吹雪の中を無理に出かけることはしないもんだ。そんな無謀なことはしない。いかなる場合でも人命を優先するというのが俺たちアイヌの考えなんだ。」と言います。

平治郎は古沢サクという父方の叔母に育てられました。劇の中で「平治郎がわしのところに来たのは6歳の時だ。平治郎は一人っ子としてかわいく育てた。平治郎が大きくなるまでコッコツと呼んでいた。」とサクが語ります。

平治郎の父は縫治といいますが、アイヌ名のヌサシビという名前から変えさせられた名前です。縫治は熊獲りの名人で力持ちだと桂恋コタンで有名でした。その縫治は、和人に騙されて昆布干場の所有権を取られてしまいます。和人は、酒を飲ませてうまいことを言って騙し、縫治から土地を奪ったのです。これに対して縫治は裁判所に訴えます。当時、裁判所は釧路にはなく根室にあり、しかも、桂恋と根室の間に普通の道路はなく、それこそ熊の道と呼ばれるような細い道を通して根室の裁判所まで通い訴えたのです。そして、和人に対して「何だ、俺たちアイヌにいつもうまいこと言って、なんで土地を取り上げたりするんだ。土地を返せ」と言うのです。また、劇ではこの土地の問題が元になり、砂浜で乱闘する場面も出てきます。

そうしたある日、サクは仕事をしていると少し離れた道ばたから突然パーンという銃声を聞きます。その銃声があったところに行ってみると縫治が血まみれになって死んでいたのです。劇ではこのことをサクに縫治が自殺という形で語らせています。しかし、自殺だと断定はできないのです。横田良輔という釧路市男子校の訓導、今でいう教諭が昭和15年に調査を行っています。そして『吉良平治郎小傳』を書いて、その中で「私の憶測、推理は加へていない。若しあれば文章の上に「であろう」としているものがそれである。全部私が当時の関係者から聞いた事と文献によって得た資料からである。平治郎は一人で嵐の中で死んだが、ここは舊土人の雪に対する信念と處置を同族の人達から聞いたものでその中に氏の性格を生かし彼の残した言葉を加えたものである」というふうには書き出しているのです。つまり、真実、彼が聞いた事、本当の事しか書かない。推理は加えないと断っているのです。その彼が、自殺のことをどう書いているかというと、不明と書いているのです。分

からないのです。誰も見ていない、つまり変死なのです。場合によっては、彼は、土地を奪った和人に殺されたのかも知れません。というのは、この時代に、アイヌが裁判所に訴えて権利を取り戻そうなどということは考えられないことなのです。横田訓導は、そこは不明としています。しかし、最後の方で自殺かも知れないということを書いているので、脚本では自殺だというようにサクに語らせることにしたのです。

そのまま終わってしまったら大問題なのです。アイヌはいかに土地を奪われたからといっても、神から与えられた命を自ら絶つ、自殺するということは考えられないからです。そこで、サクが自殺だったというせりふを言った後、多助が登場して「これは大変なことなんだ、俺たちアイヌはみずからの命を絶つという思想を持ってはいない。この縫治が自殺した明治23(1890)年頃から昆布干場は和人に騙され奪われてしまい、その多くを失ったのです。7年後の明治30年の記録によると、桂恋の昆布干場43ヶ所のうち、アイヌが持っているのはわずか4ヶ所となっていた。こんなことが許されていいのか。北海道開拓による内国植民地化、そして、どんどん和人が押し寄せ、俺たちの生活基盤のことごとくが失われていった」と語ります。つまり、自殺したということは真実とは言えないけれど、劇の中では自殺したというようにして、多助にその反論をさせるという構成にしています。

平治郎の母は夫である縫治が死んだ後、すぐに再婚します。そうしなければ生きていけないからです。その再婚により平治郎は叔母のサクに育てられる事になるのです。そこで昆布とりとか、昆布干しとか、薪割りとか、そういうことをしながら叔母の家で育っていくのです。そして、その叔母からアイヌの精神を学ぶわけです。そのことが後の展開でよく分かってきます。平治郎は15歳の時にリュウマチだったと言われているのですが病に罹ります。高熱により左手と左足が麻痺して不自由になってしまいます。その後の訓練により少しずつ動かせるようになるのですけれど、劇の中では行囊を運ぶ送人の時も他の時にも絶えず彼は左足を引きずりながら行動します。

私は、山本多助が平治郎について書き残している記録があることを知らなかったのですが、多助が亡くなり、私たちが遺品の整理を遺族の方から任せられて調べていたら、その記録が出てきたのです。その記録の中に多助が平治郎の元の雇主に会って聞き取りをしたことが書かれています。多助という人は几帳面で、いい加減なことは言わないし、書かない人でした。その記録にも、何月何日、雇主の家で、どういうことを聞いたということが細かく書かれています。それによると、平治郎は山に入って炭焼きの仕事をしていたのですが、性格は無口で、ちょっと見たところ人づき合いが悪い、だけれど「自分には障害があって人の半分しか働けないのだから、人と一緒に休んでいては濟まない」と言って、薪割りでも何でも休まずに仕事をするのです。そういう仕事ぶりですから、雇主からも非常に好かれて大事にされます。この頃、その雇主の娘が平治郎に惚れてしまいます。平治郎は非常にいい声で歌が上手

だったのですが、その歌に10代の娘が惚れてしまうのです。しかし、平治郎は「俺なんかのような者と一緒になったらだめだ」と言って拒否します。そこへサクが平治郎より1つ年上のミノを連れてきて見合いをさせます。ミノは一度結婚に失敗していて八郎という連れ子がいたのですが、平次郎はミノと一緒にいるのです。そして炭焼きの仕事を続けます。

しかし、多助の記録によると、その仕事を辞めてしまいます。なぜ辞めたのかというと、平治郎はミノの連れ子である八郎を非常にかわいがるのですが、ミノの八郎に対する態度がすごくつれない、いつもいじめている。それを雇主が見かねたと書いてあるのです。ここではミノが性悪に書かれているのですが、平治郎の性格もよく出ています。この時、雇主から辞めさせられるという結果になります。

そして、春採に帰ってきて、魚の行商を始めます。しかし、これはうまくいきません。劇の中でこの場面は大変観客が喜ぶというか、拍手をくれる非常に明るい場面になっています。というのは、平治郎が魚の行商をするのですが、「アイヌ、アイヌ」といじめられたり、和人のチンピラから喧嘩をふっかけられます。すると、八郎が父親の平治郎を励ますのです。そして「魚はいらんかえ」とい4歳の子供がやるのですが、これが非常に名演技で、そこが観客を感動させるのです。

アイヌだからということで和人にいじめられている時、八郎は平治郎に「父さん、アイヌってどうしていじめられるんだい」と聞く場面があります。そのすぐ後に、山本多助が助けに来て、そこでは、平治郎が八郎になぜアイヌがいじめられるのかを話しません。

そうしているところに、昆布森の郵便局から4里、約16キロ離れた釧路局まで、郵便物を行囊に入れて夜中に運ぶ通送の仕事をやらないかという話が入ってきます。山の仕事を辞めて、魚の行商もうまくいかず、食い詰めて、仲間からお米や魚を分けてもらって生活していた時に、石黒さんという昆布森郵便局の請負人から通送の仕事をやらないかと多助を通して話があったのです。はじめ、平治郎は「私は無学だから、そのような大切な仕事はできない」と断るのです。しかし、多助をはじめ、妻のミノや叔母のサク、子供の八郎までもがみんながやった方がいいと言うのでついに請け負うことを決意したのであります。

平治郎は、仕事を請け負うことにした翌日から、春採から昆布森に行って通送の仕事をはじめます。この仕事は騎馬通送人と言って、馬に行囊を乗せて自身も馬に乗って運ぶことになっているのですが、1日目は行囊を背中に背負って、足を引きずりながら釧路まで歩いていきました。2日目は馬に乗って行ったのですが、1月18日、19日ともなると極寒地である釧路では零下20度になることも当たり前前で、そんな時に馬に乗っていると余計に寒いのです。馬から降りて歩かなければ、体が冷えきってしまい、手の感覚も足の感覚のなくなってしまうのです。2日目に戻ってきた平治郎は、馬には懲りたとこぼしていました。

そして、いよいよ遭難してしまう3日目です。臨時通送人となって3日目に彼は昆布森の石黒さんから奥さんが困

っているだろうとあって、給料の前渡しとしてお米を5升渡されます。しかし、5升の米は行囊と一緒に持って釧路に向うには重いので、3升だけ受け取って釧路に向います。その米は釧路局へ向う途中、春採の家に寄ってミノに渡しています。釧路局へ行った平次郎は行囊の受け渡しを30分ほど行って昆布森へ向って出発しようとします。その時、相当激しい雪が降っていたので、釧路局の人が「今日は雪がひどいからやめれ」と言うのですが、「いや、俺は雪にはなれている。風が出てきたら危ないけれども、これぐらいの雪なら、これなら何とかいける。」と言って出発します。この間に、日付けは19日から20日に変わっています。釧路局を出た平次郎は春採の家に寄って、八郎の寝顔を見て、芋粥を2杯食べて昆布森に向います。そして遭難するということとなります。

釧路局から昆布森までの4里の道のりのうち1里半ぐらいのところ左の靴が半分引き裂けてしまいます。それで平治郎は仕方なく引き裂けた部分をタオルでくくりまわす。ほとんど裸足に近い状態なのですが、また昆布森局に向けて歩き出します。そして、宿徳内が近くになった時、猛吹雪になりにつちもさつちも行かなくなって、冒頭で言いましたように、行囊を自分のマントで包んで、杖にタオルを巻いて目印にして行囊を置いて宿徳内を目指します。しかし、杖を失うということは致命的なのです。雪が多くなると杖に頼って雪をこぐしかないのです。猛吹雪の中で杖は命綱になるのです。そして、ついに彼は100メートルほど進んだところで倒れてしまうのです。この場面は劇の中ではシルエットで出しています。

20日に遭難したのですが、次の日もまた猛吹雪は続きます。22日になってようやく平次郎の遭難が判明します。そして青年団や役場職員等約100人による大規模な捜索が行われるのは遭難から4日後のことです。その日すぐには見つからず、翌日になって、まず行囊が発見されます。平次郎が手ぬぐいを巻いて立てた杖が目印になって発見できたのです。そのあと、木元福松さんという人が遺体を発見するのです。発見された遺体はひどい状態でした。足の親指は骨が出ていて肉は白くなっているという状態で、山本多助の記録によると、立ったままの状態、立像の形で亡くなっていたということです。その時の雪の深さは2メートル近くあり、その深い雪の中で立ったままの状態であって書いたと書いています。

釧路警察署の山内巡査が書いた検死官報告書というものがあるのですが、普通の検死官報告書と違って、山内巡査は平治郎の最後の姿に感動して報告書の最後に「到底、普通の人の考え及ばざることなり」と書いています。こういう報告書は、かつてないもので、これからはないことでしょう。この報告書を釧路地方検察庁の歴代の検事正が読んで感動し、検察庁の機関誌などに3人の検事正が吉良平治郎の論文を書いています。

さて、いよいよ今日の話の中心に入ります。私が、なぜ吉良平治郎研究会を発足させたのか、なぜ吉良平治郎の研究が必要になったかということは、はじめにも申し上げましたが、今はあまりにも無責任な時代である、そして、簡

単に人が殺されてしまう、子が親を殺し、親が子を殺し、と目茶苦茶です。また、政界を見ても腐敗、墮落しています。そういう状態の世の中に、吉良平治郎を正しく復活させることによって、警鐘を鳴らさなければならないということが一つの理由でした。

研究会を発足させ調査を始めましたのですが、吉良平治郎の資料はあちこちに散逸していて大変でした。郵政記念日には毎年、釧路中央郵便局の人は局長以下が記念碑にお参りしているのですが、その郵便局にある資料も不十分なものでした。今回それらの資料も資料集成に載せようとしたのですが、個人情報保護法という法律ができて、個人情報に関する部分については掲載することができないこともありました。また、例えば石黒さんという請負人のことを調べたいと思っても、関係する人がどこにいるのか教えて欲しいといっても教えてもらえませんでした。私たちは調査、研究を1軒、1軒の家を訪ねながら進めなければいけないという、非常に苦しい状態になりました。資料集めも釧路の図書館だけではことが足りず、江別にある北海道立図書館まで行って資料を調べました。

それでも、どうしても不明な点が残ります。まず、山本多助と吉良平治郎は又いとこで隣近所に住んでいたと書いてあるけれども、実際にその家があった場所がどこかということが分からない、春採高台にあったとか、炭鉱の入り口にあったとか、漠然としているのです。当時の山本多助の家の場所もはっきりしません。ウタリ協会を通してアイヌの人に聞いても、大正11年当時、春採のどこに家があったのかははっきりしないのです。そういう問題は足で歩いて調査しているうちに解決してきました。それから、私たちの行っている調査、研究が新聞で報道されたので、いろいろな情報提供もありました。そうした中で、本当に隣近所だったということが分かりました。現在、春採中学校のある場所に平治郎の家があったのです。その春採中学校を建てる時に平治郎の家を壊されたようです。その中学校の前には道路を挟んで病院があるのですが、そこが山本多助の家だったのです。調査を進めると、だんだん不明な点がはっきりとしてくるのです。

調べていて非常に驚いたことであります。横田訓導が書いた吉良平治郎の年譜の中で昭和11年9月28日、陸軍大演習のための今上天皇の北海道行幸に際し、平治郎の功績を偲んで遺族に対して特別奉拝、特別にお目通りが許されたと書かれているのです。しかし、当時のアイヌは旧土人と言われていて、その旧土人に対して天皇陛下が特別奉拝を許したのだろうか、このことは本当のことなのだろうかと思いました。吉良平治郎が亡くなった後、古沢サクは加代子という娘に相続人として吉良姓を名乗らせていて、その加代子に特別奉拝をさせたとなっているのですが、当時の天皇は神聖にして冒すべからず、神であったのです。その神様が旧土人の特別奉拝を本当に認めたのだろうか疑問に思ったのです。

そこで私は、道立図書館や釧路図書館で、北海道行幸誌、釧路行幸誌を細かく見ました。そこには、参拝者全員の名前が載っていて、参拝した実科高等女学校の生徒の名前も

載っているのですが、その中に実科高等女学校の生徒である加代子の名前がないのです。特別奉拝なのだから特別奉拝のところに名前があるのかと思ったら、そこには別の偉い人の名前だけが載っているのです。吉良加代子の名前はどこにもないのです。加代子が参拝を許されたというわけではないようなのです。

元釧路教育研究会の会長で石川さだめさんという人が書いた文章の中に「天皇が通る道筋からはるかに離れた砂利道に加代子は1人平伏をしていた」とあります。これが特別奉拝でしょうか。しかし、年譜には特別奉拝という榮譽をいただいたと書いてあります。実態はそういうことだったのではないのでしょうか。

昭和5年に平治郎遭難のことが高等小学校の修身で使われた教科書に「責任」という項目で載りました。しかし、その中で平治郎がアイヌであるという事には全く触れられていません。そのことは伏せられていたのです。この教科書は全国の学校で使われていたので、たくさんの生徒が習ったと思いますが、平治郎がアイヌであるということを知ることはありませんでした。この「責任」の中に「大正天皇は国民精神作興に関する詔書の中に、『責任ヲ重シ』と仰せられ、国家社会の幸福を進めるために責任を重んずることをお諭しになった」とあります。これは、天皇陛下の御ために責任を重んじなければならないと教えているのです。

最近になって、郵政博物館で紙芝居を発見しました。それは昭和16年、太平洋戦争の始まった年に大日本文化画劇報国会が制作し、逓信省が推薦した「責任」という題の紙芝居です。その紙芝居の最後に「畏くも、今上陛下は、昭和11年9月、陸軍大演習御統監の為め、北海道行幸のみぎり、平次郎の功績を偲ばせられ、遺族のものに対して、特別奉拝の恩命を賜りました」とあります。そして、明治大帝の御製として「世の中は たかきいやしき ほどほどに身をつくす事こそ つとめなりけり 吉良平次郎君の英霊 永へに安らかならんことを。」と載っていて、それで紙芝居は終わるのです。英霊といえば靖国神社に祭られた人たちのことです。戦争の時代になり吉良平治郎はとうとう英霊にまで持ち上げられていたのです。

ある人が書いた吉良平治郎の物語にすごいものがあります。そこには、吉良平治郎が守った行囊は、公のものである。よって平治郎は天皇陛下の御ために行囊を守ったのであると書いている人がいるのです。当時、公のものということは天皇陛下のものということなのです。それはつまり、当時の社会情勢の中で吉良平治郎は徹底的に戦争の遂行のために利用されたのです。特に、私を捨てて、国のために命を捧げるといふこの滅私奉公のために吉良平治郎は最大限に利用されたのです。

それに対して山本多助は徹底的に抵抗しました。山本多助はアイヌの立場に立って吉良平治郎を顕彰しようとしたのです。平治郎はアイヌ民族の誇りである。それは、行囊を守って死んだからということではない。もちろん、責任を果たしたことは立派な行為であり、これは何人もこれは否定できない。そういうことではなく、アイヌ民族として

言えば、平治郎がどこまでも生きようとしたことである。平治郎は、猛吹雪の中、行囊を置いてタキモトという家を目指し、残念ながら目印を立てたところから約 100 メートルのところまで亡くなってしまったが、その行動は絶対に間違っていなかったというのであります。

山本多助は平治郎の顕彰するため 2 つの木彫りの像をつくっています。1 つは、修身の教科書に平治郎が載った昭和 5 年に、行囊を背負って雪の中を行く平治郎の姿、高さが 18 センチと小さいものを作っています。

次は昭和 25 年、戦後になって顕彰運動を起こして大きな碑を建てています。この時、2 つ目の木彫りを作っています。そして、山本多助は郵便局の人たちと顕彰委員会をつくり、自ら委員長となり先頭にたって銅像をつくるよう釧路市長に請願するなど運動を起しています。この時はまだ旧土人保護法は生きています。この法律はごく最近になって無くなったのですから、当然、この昭和 25 年という時代にはこの旧土法は生きています。そのような時代にアイヌの銅像を作れと、ひげ面の山本多助が言っても市長はうんと言わないわけです。そのことを劇の最後に山本多助は「平治郎、すまん。おまえの顕彰像を作らせようとしたんだけれども、俺のアイヌ面が・・・」と言って絶句します。そこで舞台の幕がおりるのです。

木彫りは釧路町に寄贈され、現在は、釧路町教育委員会が保存していて、いつでも見られるようになっています。

残りの時間で皆さんに申し上げたいことがございます。今日お話した劇は、アイヌ文化懇話会が呼びかけてつくった吉良平治郎研究会が調査したことを忠実に、事実即して再現しています。この劇は、フィクションではなく現実にあったこと、事実をもとに脚本を書きました。当時のアイヌに対する具体的な差別や抑圧の事実も入れよう、うそではない、事実をありのままいれようということで脚本をつくりました。

劇団員の人たちは私たちと一緒に宿徳内の記念碑が建っている場所にも足を運んでいます。例えば、この碑の場所についてですが、実は昭和 49 年に場所が移されていて、もとの場所がどこか分からなくなっていたのです。それが、調査の結果、50 メートルほど離れた場所から現在の場所に移されていたということが分かったのです。これは地元の竹原さんという 84 歳の方に話を聞き、さくが残っているところを見つけて場所を特定することができたのです。この碑のあった場所というのが大事なのです。もとの碑があったところから先に 100 メートル行ったところが目印の杖を立てたところで、さらにそこから 100 メートル離れた宿徳内の坂のところに遺体があったということがはっきりしているからです。

旧土人保護法によって吉良平治郎は桂恋で、山本多助は春採村にオツクルという春採湖に面した土地を給与地として国からもらっています。しかし、うまく農耕ができず、不合格ということで国に取り上げられています。そうなるのは当たり前なのです。春採にある多助の給与地だったという土地を実際に見ましたが、斜面になっていて、耕せるものではないです。何とか耕してカボチャを作ったとして

も、台風が来た次の日にはカボチャが湖の上に浮いていたという話があるところなのです。桂恋も、海の風波を受ける場所でもとも農耕ができるようなところではありません。そこで農業をやれと政府はアイヌに給与地を与え就農を強制したのですが、与えられた土地はそういうひどいところだったのです。アイヌ民族はそれまで住んでいたいい土地からそういう荒れ果てた土地に追い立てられたのです。この事実を分かってもらいたいと思いから、このことを劇の中で山本多助が語るのです。

私は 1 回目の総練習の時に初めて練習を見たのですが、この劇は市民参加劇ですから、普段は銀行員であったり、歯医者さんであったり、アイヌ文化懇話会の会員であったり、市会議員も 1 人いますけれど、そういう劇をやったことのない人たちが劇をできるようにするため、演出家の人は物すごく力が入っていました。結局、この日は、通して見ることはできず部分、部分を徹底的に練習しました。そして、いよいよ公開の日の午前中に通しを見て、ああ、これなら大丈夫だと自信を持ったのです。1 回目の公演の時は、開場するとお客さんもどンドン入って来て、私は客席に入れなくなり、舞台袖でずっと辛抱していました。2 回目の時は一番前の席に座らせてもらって見ました。3 回目の時は通路に座って見ました。

劇が終わり、皆さんにお礼をしていたら、女の方がくしゃくしゃに泣いて会場から出てきて、私もつい、もらい泣きしてしまい大変なことになってしまいました。私は、直接関係者ですから劇への思いがあります。なぜかということを考えてみると、これはリアリズムなのです。真実をありのままに描いているのです。ここにフィクションが入ってくると、架空のもの、作り物になってしまうのです。劇を演出した人が脚本を書いたのですが、この脚本ができる前にこの人の資料集成は真っ黒になっていたのです。徹底的にこの資料集成を読みこなして、劇の脚本を書いたのです。

吉良平治郎研究会がなければこの劇はなかった。そしてまた、しっかりとした事実の掘り起こしがなければ、この劇が成功しなかったらと思います。ついに、この劇を来年の 1 月に札幌でやることが決まりました。その後、もう一度釧路でやらなければならないと思っています。この次はまず、札幌でやって、そして、釧路でもう一度やる。その次は、この東京でやりたいと思っています。釧路は地元ですし、札幌にはウタリ協会の本部や郵政公社の札幌支社の協力があり、公演をすることができますが、東京では受け皿となってくるところがなければ実現は難しいと思います。今日お集まりの皆さまには、何とか力になっていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)